

## ■イブニングセミナー

## Morlaás と Liepmann

—失行論の系譜—

大 東 祥 孝\*

要旨：Morlaás の失行論の概要を紹介した。彼の批判的視点が、とりわけ Liepmann の失行論における「行為についての連合心理学的図式」に対するものであったことを指摘した。Morlaás は、行為の質的差異（象徴的行為と実用的行為）に着目し、独自の失行論を打ち立て、それは今日においても De Renzi らによって受け継がれ、とりわけ Signoret の失行論において、記号論的に飛躍をとげていることを評価した。神経心理学 9：76～78

Key Words：Morlaás, 失行, Liepmann  
Morlaás, apraxia, Liepmann

今日の失行論において重大な意義を有しているにもかかわらず、Morlaás 失行論は、Liepmann のそれほどには充分に知られていないように思われる。彼は単に観念失行を使用の失認とみなすという提言を行っただけの人ではない。その失行論は根本的に Liepmann のそれと鋭く対立する部分を有していた。彼の立場はあくまで臨床的であり、「行為」をめぐるあまりに図式的な連合心理学的「思弁」には批判的であった。最近とみに明瞭となってきた De Renzi (e.g. 1988) と Poeck (e.g. 1986) の対立は、もとを辿れば Morlaás と Liepmann の立場の相違に帰着する部分が多いと思われる。ここでは随時 Liepmann の学説と対比しながら Morlaás の失行論を吟味し、ついで今日の失行論へと至る系譜をたどってみたいと思う。

## I. Morlaás の失行論

彼の“Thèse”が公けにされたのは1928年のことで、その頃には Liepmann の失行論はすでに確立されていて、フランス語圏では Deje-

rine がおおむねそれを引き継いで自説を述べていた。しかし、すでに Liepmann の失行論に対する批判はさまざまなかたちで表明されつつあった。von Monakow (1914) の“diaschisis”説はよく知られていたし、観念運動失行 (apraxie idéo-motrice) という概念の「曖昧さ」は P. Marie によって鋭く指摘されていた。Morlaás はこうした流れのなかにあって、Pick, von Monakow, Wilson らの見解にも深い関心を寄せつつ、とりわけ Ch. Foix の影響下に自らの失行論を展開していった。

Morlaás の Liepmann 批判と彼の失行論の概要は、大きく次のようにまとめることができると思われる。(1)Wernicke の精神反射弓の概念を敷衍して想定された行為の心理学的図式は、必ずしも失行という事態を真に解明したことになってはいない。というのも、彼の言う運動企図 (Bewegungsentwurf) や運動形式 (Bewegungsformel) の概念の実在性を我々は容易に知ることはできないのであるから。(2) Liepmann はこうした図式に拘泥したために、

1993年3月8日受理

“Morlaás and Liepmann”—genealogy of the theory for apraxia—

\*京都大学留学生センター／大学院人間環境学研究所, Ohigashi, Yoshitaka : Graduate School of Human Environmental Studies of Kyoto University

失行はすべてこの図式から導出できると考えた。つまり失行発現のメカニズムはすべてこの図式に従うはずであって、運動企図のレベルで障害をうければ「より複雑な」運動が困難になり、一方運動企図が保たれているのに、それと運動の記憶心像 (kinetische Engramme) との連合が絶たれると「より単純な」運動が困難になるわけで、前者が観念失行であり、後者が観念運動失行であるということになるわけである。しかし、こうした発想からは、人間の行為そのものの重要な「質的差異」に想到することはないであろう。Morlaás は、人と人が互いにメッセージを送りあうことから生じてくる「象徴的行為」(geste symbolique) と、道具を作り上げそれを使用することに関わる「実用的行為」(geste pragmatique) とが、根本的に異なるものであることを強調する。そして、前者と後者とが別個に独立して障害されうることが臨床的に経験し、前者に困難を示す場合を観念運動失行、後者が困難になる場合を観念失行と称したのであった。(3)Liepmann は自らの理論的立場からの当然の帰結として「より複雑な行為」である (Pick が示したような) 系列行為の障害こそ観念失行であるとし、「より単純な」行為の損なわれるのが観念運動失行であると考えた。これに対し Morlaás は、次のような症例をあげている。彼女は十字を切ったりする象徴的行為に何ら困難を示さず、かつ、ローソクに火をつけたりする「系列行為」にも一応は障害を認めなかったにもかかわらず、ペンで名前を書こうとして、インクを付けずにそれをまるで鉛筆のように使って何度も書こうとして失敗し、ハサミを呈示するとそれで字を書こうとしたのである。実際にはこれはかなり例外的な症例ではなかったかと思われるけれども、物品の使用というものが必要でも、単に系列的で複雑になればより困難になるといった性質のものではないことをよく示しているように思われる。Morlaás は、こうした場合、問題なのは操作すべき物品が何であるかわからないのではなく、その物品の実用的意味 (signification pragmatique) が失われているのだと考え、そ

れこそが観念失行であるとみなしたのである。(4)Morlaás にとって真の失行は観念運動失行であり、これはいくつかの病型からなる臨床的病態なのであって、観念と運動の離断に基づくといった理想的仮説に依拠するものでは決してなかった。実際の臨床型は、大きく喚起失行 (apraxie d'évocation) と遂行失行 (apraxie d'exécution) とに分けられる。前者は命じられた動作が思い出せない場合であり、模倣によって可能となる。一方後者は、保続性要因と空間的運動錯誤 (dyskinésie spatiale) 要因からなっている。空間的運動錯誤というのは観念運動失行の中心的症状の一つであり、要するに自らの身体と外空間との関係性が破綻することによって目的とする仕種を行えなくなり、中途半端な錯行為を示すことになるというものであり、これは意図的には模倣によっても改善しない。こうした要因の比重によって観念運動失行の臨床像が形成されることになる。(5)最後に、Morlaás の失行の定義についてみると、最も広義には「運動の遂行にかかわる意図的な活動の障害」(un trouble de l'activité volontaire intéressant l'exécution des mouvements) である。これに対し、Liepmann は失行を「運動遂行器官に異常がないのに、目的に沿って運動を遂行できない状態」"Unfähigkeit zu zweckgemässer Bewegung der Glieder bei erhaltner Beweglichkeit" (1905) と定義している。基礎的な運動障害がないのに目的とする行為ができない、という点では両者の定義は共通しているけれども、Morlaás の方は「意図的な活動」の障害であることを明確に述べている。本来の「失行」にとってすぐれて特徴的な「自動的行為と意図的行為の解離」という現象を無視して真の「失行論」のありえぬことは確実である。Liepmann は、これを短絡反応 (Kurzschlußreaktion) と称していて、こうした現象の重要性に気付いていたことは確かなのであるが、彼の失行図式そのものは、心理学的水準のものであれ、解剖学的水準のものであれ、容易には「Baillarger-Jackson の原理」を説明できるものではなかった、といわねばな

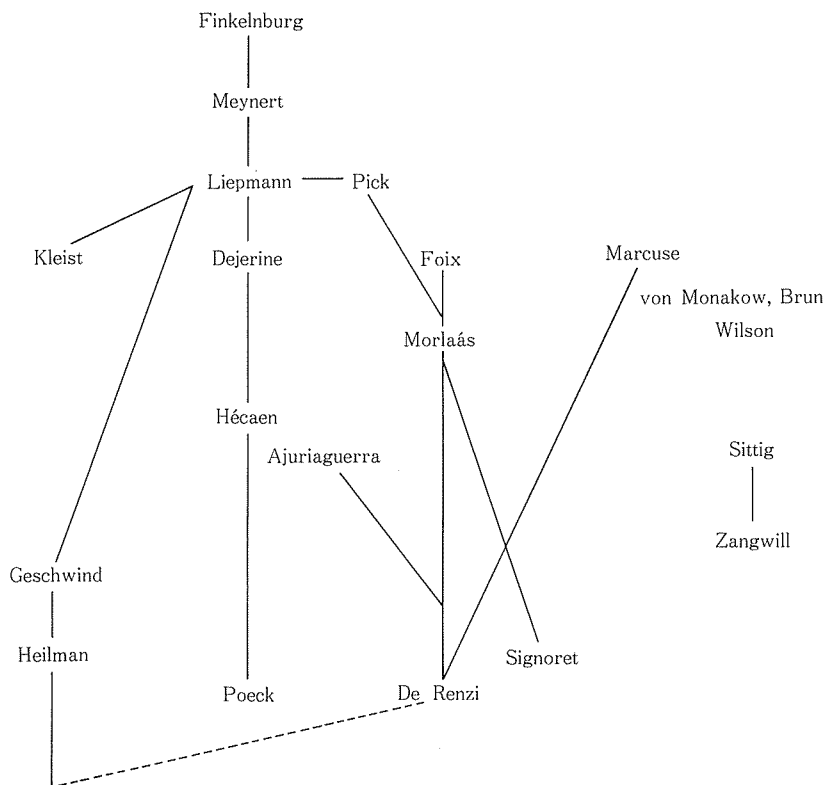


図1 失行論の流れ

らない。

## II. 失行論の系譜

前節でのべたように、LiepmannとMorlaásの失行論は最も重要なところで互いに相容れない部分を有していた。この見解の相違は、現在に至ってもなお解消されることなく続いているといってよいだろう。最近の諸説を詳しく紹介している紙幅はないので、ここでは大まかな流れを図示しておくにとどめるが(図1)、筆者としては、Morlaásの考えを最も興味深いかたちで記号論的に発展させたと考えられるSignoret(1979)の失行論を評価しておきたいと思う。その詳細については別に紹介する機会があったので参照していただきたい(大東, 1986)が、筆者が最も強調しておきたいのは、失行の本質を特徴づけるのは必ずしも行為そのものの種類であるのではなく、むしろ誤り方の

質的差異(意味性錯行為、運動性錯行為)にあるのではないか、ということである。

## 参考文献

- 1) Liepmann H: Drei Aufsätze aus dem Apraxie-Gebiet. S. Karger, Berlin, 1908
- 2) Morlaás J: Contribution à l'étude de l'apraxie. Amédée Legrand, Paris, 1928
- 3) Signoret JL, North P: Les apraxies gestuelles. Masson, Paris, 1979
- 4) Poeck K: The clinical examination for motor apraxia. *Neuropsychol* 24, 129-134, 1986
- 5) De Renzi E, Lucchelli F: Ideational apraxia. *Brain*, 111, 1173-1185, 1988
- 6) 大東祥孝: 観念失行をめぐって. *失語症研究* 6: 965-971, 1986